白道のカミーノ便り

草③

振動病、ロボット夢見て

九州の工房で十数年前、一緒に穴窯をたいていた息子に指摘され愕然とした。窯の温度を指先で感じることが出来なくなっていた。

長い間、振動防止のない安価なチェーンソーを何台も使い潰し、手おので数百トンにものぼる薪を割ってきた。そのつけが回り、振動病になっていたのである。40度の風呂の湯を熱湯のように感じた。冬には手足の指先がしびれて白くなり、感覚がなかった。

美郷町ではチェーンソーも草刈り機も使わないわけにはいかない。かみさんは「それは男の仕事でしょう」と手を出さない。

振動防止の手袋は使うが、5分もすれば指先がしびれる。40分ほどで燃料がなくなれば、いったんやめることに決めている。

テレビでロボコンを見た。全国の高等専門学校生が競うロボットの大会である。中国地方のレベルは高い。頭の柔らかい若者たちが草刈りロボットを開発し、草に占領された山間地を会場に競い合うロボコンは出来ないだろうか？

ロボットを作る楽しさが地域再生の手伝いにもなるとしたら、興味を持つのではないか。作品を試すために山間部に通えば、豊かな自然と住民の素朴な人情に触れ、地域の抱える課題の深刻さも知るだろう。田舎で暮らしたい若者に育つかもしれない。

長寿先進地の島根に、スウェーデン人も驚く将来を夢想する。田畑で一服する100歳の元気なおじいさん、おばあさんの傍らで、集落支援員のロボットたちが歌いながら働いている光景である。

緑にのみこまれそうな我が家＝筆者撮影

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。